

体育哲学専門領域

高橋浩二（長崎大学），深澤浩洋（筑波大学），小林日出至郎（新潟大学）

1. あらまし

本コラムでは、本領域が年4回発行している『体育哲学専門領域会報』から最近6年間の報告を取り上げ、研究動向や最近の知見を紹介する。それは、本領域の研究者が「自らの言葉」で「体育哲学の実践」を念頭において発信している『会報』の内容を紹介することによって、研究者の問題意識や研究態度を垣間見ることが可能になるからである。

2. 内外の研究動向

「体育哲学を実践する」とはどういうことか。樋口（2010）は、「哲学の実践を試みる第一歩は、自己の経験の問題化である。」（Vo.14(3),p.1.）と述べ、自身に生じた問題について「哲学を実践」しながら、「臨床教育学ならぬ教育臨床学への試み」を提唱する。また、舛本（2014）は、自らの体験を振り返りながら、「実践的身体哲学」（Vol.17(4),p.1.）について論ずる。この実践は「自己」だけではなく、「他者」にも通じている。本領域では、年3回の定例研究会を開催し、研究成果の報告や領域としての関心事について議論している。また、昭和37年から夏期合宿研究会が開催され、「体育哲学を実践する」場が提供されている。特に、大学院生の参加が増えている近年では、所属大学以外の教員や学生との交流が盛んになっている。さらには、本領域は日本体育・スポーツ哲学会との連携を積極的に図っている。最近では、平成25年度の日本体育・スポーツ哲学会第35回大会のシンポジウム「体育・スポーツ指導における体罰・暴力問題—人間の尊厳保持と豊かなスポーツ文化の発展に向けて」を後援し、本領域の研究者がシンポジストとして登壇している。なお、本領域に属している研究者は、International Association for the Philosophy of Sport (IAPS：国際スポーツ哲学会)等の国際学会に参加し、研究成果を公表している。本学会国際誌(IJSHS)の編集者に上記学会に所属する海外の研究者が含まれることから、交流だけではない研究の発展を窺い知ることができる。

3. 科学的知見の応用の状況

本領域における科学的知見は、他領域のそれとは別様に考える必要があるだろう。例えば、石川（2009）は、「理論的知識の体験的知識化」を提唱し、「教育の実践の場において、それまでに見出された科学的な（客観的）知識及び哲学的・概念的な知識を、教育の場において学習者個人にいかにも実践的に体験的知識に移し換えるか、その方途を検討することも重要である」（Vol13(1),p.1.）と述べる。我々の関心は科学それ自体に向けられるこ

ともあれば、実践や体験といった「人間の生」に関わるところで諸科学をどのように位置づけ意味づけるか、といったメタレベルでの関与に向けられることもある。

4. 学校体育や大学体育に活かすべき最新知見

本領域からの最近の知見として、学校体育や大学体育への有用な論点を以下の論考から挙げるができる。釜崎（2010）は、日本の教育の現状とその研究動向を紹介しつつ、「ポストモダン的な閉塞状況のなかで実行力をもたらす体育研究を確立させるためには、実践現場の問題から距離を取りつつ、体育研究が使命とする『体育をどうするか』という問いに答えていかなければならない。」（Vol.14(1),p.3.）と指摘し、「現場の深層に潜んでいる問題を可視化させる努力」の必要性を主張する。また、田井（2010）は、「武道の文化性」を問う際に、中学校保健体育科における武道の必修化を挙げ、「身体運動文化のグローバル性とローカル性を見つめ直すトランス・ナショナルな視点を育むこととなるだろう。」（Vol.14(1),pp.5-6.）と武道の文化性の再把握について示唆している。この武道については志々田（2013）が、武道家の富木謙治との関係や彼の武道論を取り上げ、武道の本質を「実用性」と示しつつ、その問い自体を「武道文化（価値）の普及のための理論として定立されざるを得ない。」（Vol.17(2),pp.1-2.）と指摘する。また、杉山（2011）が、体育を「身体性（身体と動きの関係性）を基盤とする教育領域であり、複合的構造からなる実践的総合領域」と捉え、体育論構築の試みの可能性と現代的意義を示す

（Vol.15(3),pp.2-3.）ように、そして森田（2012）が、教員養成科目としての「体育原理」領域の授業について「専門体育」「一般体育」の対概念（佐藤臣彦）や「プラトンの『洞窟の比喻』」を取り上げ、教育や体育の本質を考える必要性を指摘する（Vol.16(2),pp.2-3.）ように、実践や現実との関係から体育の本質が捉えられる。

5. 若手研究者へのメッセージ

「体育哲学を実践する」際、老いも若きも享受した上で議論が展開される。従ってこのメッセージは「若手」に限定されることはない。佐藤（2009）が指摘するように、「体育哲学やスポーツ哲学も、それが哲学である以上、体育やスポーツをめぐるさまざまな諸問題を、目に見える表面的・表層的な位相においてではなく、そうした問題を惹起せしめている深層の仕組みにおいて把握する必要がある」（Vol.13(3),p.1.）からであり、そのために彼は「専門的修練の必要性」を説く。また、滝沢（2013）は、体育哲学における「本質的な知」の必要性を主張し、「知を蓄えるためには、個々人の努力だけではなく、多くの仲間を作る必要があります。年配者が研究環境を整え、中堅が研究を深め、それによって若手を育てる必要があるでしょう。」（Vol.17(1),p.1.）と提言する。本領域では研究者が仲間となり、研究環境を作ろうとしている。「体育哲学の実践」に期待されたい。

6. 引用文献

- 日本体育学会体育哲学専門領域編（2009-2014）体育哲学専門領域『会報』Vol.12(1)-18(1).
URL : <http://163.43.177.95/genri/framepage5.html>
- 日本体育・スポーツ哲学会ホームページ URL : <http://www.jspspe.jp>
- 国際スポーツ哲学会（IAPS） URL : <http://iaps.net> （2014年6月2日執筆，7月14日修正）